

次 目

信心の心得(下)……………	本多日生
開目鈔講話(第四十五講)……………	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(十四)……………	河合陟明
大東亞建設……………	本聖院
記事	
○本部闡報	
○福島教信	
○産報會記	
○入帳報告	

號月八年七十四第



統

法財人團

統

一團

發行

財團統一團趣旨
法人統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ週達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持続セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧 則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ
テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」
ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ寄附セラル方ヲ正團員
トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

信心の心得 (下)

五、信仰の生活

本多 目 生

そこで進んで信仰の生活といふ事をお話して置きたい。近頃の傾向では、何と言つても人間は食はずには生きて行かれない、いくら信心をしようと何にも食はずには居られないではないかといふやうな事から、宗教生活といふ問題でも、だん／＼考へて見ると生活の方へ、物質の方へと佛教を引張つて来るやうなことを言つて居る者が多いけれども、さうではない、佛教の力に依つて生活が善くなつて行くといふことは、人格が直つて行くことである、のらくら者が勤勉な者になるといふことは宜いけれども、信心すれば物質の生活から考へて何か非常に役立つて樂に生活が出来るやうに考へるといふことは、宗教を墮落せしむるものである。私の言ふ信仰の生活といふのはそれとは反對で、信仰を基にしたる心で生活をして行くといふ事である、生活の方に宗教を引つけるのではない、宗教の方に生活を引つけて行くことである。それかと言つてむやみに昔の坊さんのやうな遁世生活をしろ

といふのではないが、生活が不如意でもグヨ／＼言はないやうになる、非常に小さい事でも力を感じて来る。それは心に信仰の喜びを持つて居る所に普通の喜びが加はつて来るのであるから、チョツとした喜びでも非常に強く感ずるのである。例へば机の上に一輪の菊の花があつても非常に綺麗に感ずる、今も信者の人が持つて来て呉れた二三輪の菊が一把挿しにさしてあるが、私はこれを見て「ああ綺麗に咲いたナ」と感じて居る、これは大きな花園に一パイに咲き亂れて居るのも同じ感じである。御馳走でもさうで、澤山の御馳走は食べぬでも、芋と蒟蒻で結構、鹽から煮付も時には美味しいものだと思つて食べればおいしく食べられる、御馳走をこつちの心の中で美味くして行くやうな方法を私は常に研究して居る。それは食ふ方の人の心の持ち様の話であるけれども、奥さんは御馳走には餘程注意して行かなければならぬ、御飯の炊き方であるとか、漬物の拵へ方などといふものは、婦人の一生の生活の優劣の岐れるところである、御飯の炊き方が下手であるとか、漬物の拵へ方が下手であるならば、そんな奥さんは落第である、斯ういふ事は一生懸命に研究すべきものであると思ふ。如何にして味噌汁をうましく食はすべきかといふことに就ては、餘ほど熱心に研究する必要がある、特別の御馳走を拵へるといふことは要らぬが、「この御飯とこの味噌汁とこの澤庵があつて御飯が不味いと言へますか」といふだけの自信は持つて行かなければならぬ。いづれにしても家庭の生活に宗教味を加へるといふことで、さうすれば物質の方は質素にして行つても幸福は湧いて来る、今後の生活はどうし

ても物質の方を減して精神生活で補つて行くといふことが必要である、唯だ物質の飽満を得ようとする、信心しても其の値打が分らない。物質の方が減じて精神の喜びで生きて行かうといふことを訓練せられると、益々信心の尊さが現はれて来る譯である。

それから同時に本當の喜びは、やはり自分が願を立てて行くことであつて、何なりと自分の力に適つた仕事を選んでそれを仕上げに行く、婦人會なら婦人會を守立てて行くといふことに力を注いで行けば、其の仕事に興味を感じそこに又幸福を感じて来る、さうして益々腰を据えて其の仕事を進めて行くことが出来る。家庭に於ては家の内を整頓するにも多少の理想を加へて、それをキチンと仕上げに行く、家の内の掃除でも、自分は信心をして居るのだから、だらしのない生活をして居つてはいかぬといふ風に、キチンとやつて行くやうにする。さうして自分が始終自己を反省して、斯ういふことは自分の心得違ひになりはしないかといふ風に考へて生活して行くと、非常に立派な生活が開かれて行くものである。

斯様にして行はれる生活は本當に満たされた精神生活であつて、そこに僅かの物質を加へてもそれが非常なる喜びとなるのである。さうして苦樂共に満足以て迎へるのであつて、朝夕南無妙法蓮華經と唱へるといふことは、この信仰の生活を示したものである。日蓮聖人から與へられた信仰は、「一歩も歩まずして晝夜に靈山に往復す」と仰しやつた如くに、この體は娑婆世界の複雑なる人生に居り

ながら、健實なる信仰を持つて居る自分の心は佛様の居らつしやる靈山淨土に往くことが出来る、
 一步も歩まずして筆を合せて眼を瞑つた時には、常樂我淨の喜びを身に感ずることが出来るのである
 『晝夜に寂光の寶土に往復し給ふべし』と言はれて、夜でも晝でも筆を合せて眼を瞑つた時には寶土に
 行けるのである。死ななくても生きて居る間に何時でも行かれるやうに考へて、常に佛様を渴仰し、
 佛様のお傍で生活することが出来ることを喜んで行くのである。日蓮聖人は常にその事を教へられて
 顯佛未來記にある如くに、自分が息絶えたならば直ちに釋尊のお傍に行くことが出来る、『悦ばしい哉
 未だ見聞せざる教主釋尊に侍り奉らんことよ』、さうしてその間が非常に速いので、須臾の間に、ほん
 の僅かの間に佛様のお傍に行くのである。何も急いで行く所ではないけれども、人生の終りに達すれ
 ば其處に行くといふことを言はれたが、そこに非常な喜びを持つて、本當に寂光の寶土に往復して、
 何時でも佛様にお目にかかつて又戻つて來られるといふやうな感じを持つて生活をして居る者が、こ
 れが信仰の生活なのである。

それが一切の喜びの源をなして居るのである、病氣が癒つたとか、金が儲かつたとか、そんな一時
 的の事が喜びの原因ではない、モット〜深い所に眞の喜びはあるのである。若し病氣がなほるとい
 ふならば、己れを苦しめた所の一切煩惱の病氣を退散せしめて、さうして何の病氣もないところの佛
 様に成れる、間違ひなく成れる、他の事は狂つてもこの事は狂ひは狂はない、太陽西より出づる事は
 あらうとも、海の潮の満干ぬことはあらうとも、法華經を信じたる者は餘すところなく教はれぬ事は
 ないといふ喜びが溢れて來る譯なのである。どうかお互に斯ういふ心得を以て彌々信心を勵み、益々
 幸福な生活に入りたいと考へる次第であります。(丁)

謹 告

戦時に於ける國民教化は、當然國家意志の具體的發動に基き、之を表裏一體内外應呼、専ら
 其人格完成へと精進すべきなり。於是特に來る八月四日より七日迄、四日間、毎晩六時
 半より九時迄、於本部信仰報國夏期講習會を開催し、我國精神文化の體系を發揮して、道
 義に立脚する新秩序を確立せしめんとす。希くは各位の御清援あらんことを。

財團 統 一 團
 法人

開目鈔講話

(第四十五講)

小林一郎

六

この間は涅槃經の本文を引かれまして、信仰にスツカリ身の力、心の力を残らず打込まなければならぬといふことを説かれた所まで讀んで居りました。それで母親が自分の産んだ子供を可愛がる心持から子供を伴れて河を渡る時に、その子供を手放すことが出来なかつたので到頭親子共に溺れて死んだ。その慈悲の心持に依つて後の世に於ては梵天に生れることが出来た。それはつまり慈悲の心持といふものは總ての人間の心持の中で最も尊いものである。その慈悲の心持に依つて斯様な結果が得られたのだ。斯ういふことを言つて居られました。今日はその續きであります。

引業と申すは、佛界までかはらず、日本漢土の萬國の諸人を殺すとも、五逆誘法なければ無間地獄には墮ちず、餘の惡道にして多歳を經べし。色天に生るゝこと萬歳を持ってども萬

を冒して、その信仰を變へないといふことであれば、その善き業の報いとして後の世には佛界に到達するといふことも更に疑ふべき所はない。

されば佛のお心持を自分の心持として、一切衆生を救ふ爲に力を盡すのが一番尊い事である。日本や支那やその他方々の國の人を殺しても、五逆の罪を犯すとか、或は誘法の罪、即ち佛の教に背くやうな罪を犯さなければ無間地獄には墮ちないで、その他の地獄とか、或は餓鬼とか、畜生とかいふ所に墮ちて、いろ／＼な苦しみを受けるのである。それから又一「欲界」といふこの世界を離れて「色界」に生れるといふことは、大變尊いことに言はれて居る。「欲界」とは身があつてまた欲望のある者の住む世界。「色界」といふのは身だけはあるけれども、欲望が無くなつて洵に淨らかな生活をする世界である。その色界に生れるといふことは大變に尊い事だけれども、その色界に生れるのはたゞ佛の戒を守つて、いろ／＼な善い行ひをして、世間の役に立つといふ位のことではならぬ。一心に佛の教を信じなければならぬ。若し散亂した心持をもつて、或る時は佛の教を信じたり、或は時にはその信心が弛んだりするといふやうな、所謂「散善」であるならば、たとひ善を行つても色界に生れるといふやうな結果は得られない。又梵天王となるといふことは

善を修すれども、散善にては生れず。又梵天王となること、有漏の引業の上に慈悲を加へて生すべし。今此貧女が子を念ふ故に梵天に生る、常の性相には相違せり。章安の二はあれども、證する所は子を念ふ慈念より外の事なし。念を一境にするは定に似たり。專子を思ふ又慈悲にも似たり。かるがゆへに他事なければども天に生るゝか。

一體人間の爲すことに於て業と報との關係は少しも狂はないもので、善い業をすれば善い報いが来るし、悪い業を積めば惡報が来るといふことは當然である。これは下は地獄界から上は佛界に至る迄少しも變らぬことであります。それだから法華經を弘める爲にさまざまの艱難

「有漏」即ち迷ひがありながら、その迷ひを離れる爲にいろ／＼修行するのみならず、更に深く一切衆生を憐れんで、一切衆生を救ふ爲に力を盡すといふ慈悲の念を持たなければならぬ。その慈悲の心持の起きた結果として、初めて梵天に生れるのであります。

今この涅槃經の中に書いてあるところの貧女が梵天に産れたといふのも、子を念ふといふ慈悲の心持があつたから、それで梵天に生れることが出来たのである。これは特に尊いことであつて、普通の世間の業報の例とは大いに異つて居る。世間の普通の行ひでは唯だ善い事をすれば善い報いがあるといふくらゐの簡單なことだけれども、大きな慈悲心を持つといふことは非常な大きな力であつて、此の大きな力に依つて、後の世は佛の境界にも生れることが出来るのである。これ程尊いことはない。

それで章安大師はこれを二種に分けて説明をして居られるけれども、要するに梵天に生れたといふことは子を念ふ慈悲心より出たに外ならぬのである。であるから親が子供を思ふといふこの心持が一番尊い。ところが前にも申したやうに、親が子を思ふといふことは、これは教を受けなくても別に宗教の信仰などはなくても人間としては皆有つて居るのであります。普通の人は自分の子を可愛がる心持があつても、他家の子供はどうでも宜いと

七

いふやうな心持が随分ある。親子、兄弟、夫婦の間に於ては別に教を受けなくても、自然の人情として愛し合ひ睦み合ふといふことは致します。けれどもさういふ關係を離れてしまふと、どうもその心持が疎くなる。そこで教を學ぶといふ必要が起つて來るといふことを教へられて居る。これは別に佛様が吾々に無理な註文をなさるのではない。人間の本來有つて居る性質ナンです。自分を捨て、他の者の喜びを一緒に喜び、他の者の心配を一緒に心配してやるといふことは、何も習はないでも親子の間では現にやつて居る。子供が乳を飲んで笑つて居れば母親は喜んで居る、子供が火の付いたやうに泣けば母親は心配して居る。これは誰も習つたことではない。本來ある。その本來ある性質を狭い範圍だけに限つて居るから世の中といふものはだん／＼險惡になつて來るのであるから、我が子を受する心持を移して人の子に及ぼし、兄弟睦み合ふ心持を以つて近隣に及ぼし、モツと大きな國家社會にも及ぼすといふことであれば、それは世の中はキツと善くなるに相違ない。それだから佛が説かれる教といふものは少しも無理を言つて居るのではないのだ、親子の心にある種を養つて大きくして育て、行きさへすれば、世の中は善くなり、社會はまるで建直るではないか。斯ういふ事を言はれて居るのであります、根本を

言へばやはり所謂慈悲の心持より外ないのであります。サアその慈悲の心持は何だと言へば、自分を捨てる心持自分を捨てるといふことは、それは自分を完了する道であります。お互に人はどうでもかまはない、自分さへ良ければ宜いと思ふけれども、自分一人になつたらこんな心細いことはありはしない。やはり仲間が欲しい。

これは前にも申上げたと思ひますが、お互が暗闇で道を歩いて居ると——この頃東京はさうでもないけれども吾々の子供の時は随分往來は暗かつたが、暗闇の道を歩いてぬかるみに踏込んでビシヤツとはねを上げると「オヤ／＼酷い目に遭つたナ」と言ふ。誰に言つて居るのでもない、暗闇だから聴き手は無いのだけれども自然に言ふ。誰か其處に相手が居るやうな氣分で、肚の中で酷い目に遭つたナと思ふと、つい、酷い目に遭つたナと言ふするとチヨツと氣が紛れる、變なものです。どうも人間といふものは一人では居られない。苦しい時は苦しいナと言つて見ると紛れる、嬉しい時には嬉しいナと言ふと快い氣持になる。ヒヨツト外へ出て見ると十五夜の月が出てゐる。「ア、月が出たナ」と一人で言つてゐる、誰も聞いて居ない。けれども言つて見ると月が餘計明るいやうな氣分になる。これは人間の本性であります。決して人間は一人で居られるものではない。それが人の人たる

本性であります。その本性を小さい所に限つてしまつてはいけないから、親子の間に働いた慈愛の心持を他人にも及ぼし、兄弟夫婦の中で働いて居るところの睦み合ふ心持を村に及ぼし、町に及ぼし、國に及ぼし、モツと大きく言へば人類全體に及ぼす。斯ういふことになれば、世の中のいろ／＼な面倒な問題がだん／＼と解決されて行かうといふ譯であります。

だからそれは無理な考ではないといふことを心得なければならぬ。吾々はどうも今までの習慣に執はれて居るから、何か慈悲を行ふとか、世の爲、人の爲に力を盡すとかいふやうなことを見ると、これは骨が折れるナと初めから思つてしまふけれども、さうではない。これは本當の自分の本性をモツと擱けて大きくするだけの話ですから、能く考へれば少しも無理なことではないのであります。

それをこの間から讀んだ所で説かれて居ります。この子供を可愛がる心持といふものは所謂慈悲だが、その慈悲の心持といふものは實に尊いものである。その貧しい女が自分の子供と一緒に溺れたといふその慈悲の報いとして、後の世は天上界に生れたといふのである。

「念を一境にするは定に似たり」一境といふのは一つの事柄、子供が可愛いと思ふ。斯ういふことより外に何も

選ぶ所がない。「定」といふのは心が定まつて外に散ららない。人間は一度に二つの事は考へられない筈であります。これは解り切つた話です。今此處でこの瞬間にしなければならぬ事といふものは一つきりない。一度に二つの事は出来ぬ。そんな解り切つた事を忘れて居る。これ一つ一つの事をやり掛けては又他の事をやつて居る、又他の事をやつて居る、一度に二つも三つも、頭腦を方々へ使つて居るから、結局どれも物にならない。蛇蜂取らずといふことを始終やつて居る。それを氣が附いて一度に一つきりしかないと決める。それは難かしく言へばきりがないけれども、それが所謂禪定であります。今すべき事は一つきりないから、心をあつちへ向けたり、こつちへ向けたりしてはならない筈であります。お經を讀む時はお經を讀んで居たら宜い、飯を食ふ時は飯だけ食つて居たら宜い。ところがどうもそれが出来ない。お經を讀みながら「ア、自動車が通るナ、何處へ遊びに行くのだからか美しいと思ひながらお經を讀んで居る。飯を食ふ時は飯だけ食つて居れば宜いのに、ア、飛行機が飛んで來たナ、何處へ行くのだから。……少しも心が一つ所に定まりはしない。あつちへ向いたり、こつちへ向いたりして居る。それだから何にも物にならない。やつた事は手に付きはしない。

甚だ悪口を言ふやうだけれども、私は能くさう思ふ。あまり餘計な事を考へるから疲れるのではないかといふことをよく考へて見るのであります。つい、この間も丸の内の方へ行つてそんな話をした。毎日午後四時頃になると、丸の内の方々のビルディングから若い人がぞろぞろ出て来る。皆一日の勤めを終つて家へ歸る、見ると疲れたやうな顔をしてヒョロ／＼して出て来る。それから私はさういふ人を捉まへて聽いて見た『失禮ですがあなたは一昨日幾時間働いたのですか』『エ、午前八時から午後四時までです』『すると八時間ですか』『さうです』『その内晝休みの時間があるでせう』『あります』『では全體で七時間と少しぐらぬしかならぬではありませんか』『さうです』七時間働いて何だつてそんなに疲れるのです。見ればあなたは三十歳前後で、身體も壯健だから七時間や八時間で疲れる筈はないではありませんか、それなのに何でそんなに疲れて居るのですか』斯う聞いて見ると當人に解らない。たゞ疲れたと言ふ。それから私は人が悪いやうだけれども、さういふ所を他所からあの人はどうして疲れるだらうかと思つて覗いて見た。成程疲れる筈です。頭腦をあつちへ使つたり、こつちへ使つたりして居る。自分の仕事だけやつて居ればそんなに疲れるはしない。顔面を附ける時は顔面だけやつて居れば宜いけれど

も、いろ／＼な事に氣を使つて居る、ブウ／＼……ア、自動車だナ……直ぐ頭腦を使ふ。人が道入つて来る、新しい洋服を着て来たナ、彼奴工面が宜いな……重役の部屋から誰か呼ばれると、彼奴能く重役の所に呼ばれる、いやに御負だナ……頭腦をこつちへ使つたりあつちへ使つたり、一時間で三時間ぐらゐに使つて居るから、八時間勤めて二十四時間分ぐらゐ疲れる、さうして頭腦がフラ／＼になつて歸つて来る。あんなことでは長生きしない、自分で自分を苦しめて居る。一度にしなければならぬ事は一つきりないのだから、あれを考へたり、これを考へたりして自分で自分の頭腦を揉みくちやにして居る。そんな事を言つて人の悪口を言ふやうだけれども私共もやつて居るのです。私共鏡を見て、皺が殖えたナ、白髪が殖えたナと思ふが何の爲に出来た皺であるか、何の爲に出来た白髪であるかと思ふと、大事な事の爲に出来た白髪はありはしない、今申すやうな要らない事に頭腦を使つていら／＼して居る、それでいつの間にか白髪が殖え、顔の皺が餘計になつたりする。悲しい事であり

力を打込んで行きますれば、音調的の境遇や事情はどうであらうとも、自分の心に喜びがあり、自分の心に満足があり、さうして一體何しに生きて居るだらうかと考へた時に生き甲斐があるのであります。それがだん／＼大きくなつて、さういふ心持ばかりになつて行けば、所謂一切衆生を救ふ爲に教を説かれたといふ佛の境界に近づくことも出来る譯であります。

だから法華經の中に
深く禪定に入つて十方の佛を見る

とあります。禪定へ入つて心を他へ散らさない。人生の目的は何だ、一體自分は何しに生きて居るのだと本當に考へた時に、十方の佛様と自分の心と通ひ合ふやうになれる、つまり事頭腦を使つて居るから、いつ迄経つても、題目を唱へたつて、念佛を唱へたつて口先だけで仕様がなない。であるからいつ迄経つても佛様と自分と縁がないのであります。深く禪定に入つて靜かに考へて見れば、十方の佛と相接して居るやうな、共に居るやうな心持にもなれる譯であります。

ですから今の譬へを出されて、この涅槃經の中にある若いお母さんが子供の事より外に何も考へないといふ時には、モウ子供の事だけに心が向いて居りますから、所謂禪定で、モウ他に考が向いて居ない。さういふ心持

で吾々も一切の事を考へたならば、毎日のやる事がそれ／＼意味があるに相違ない。それから「尊子を思ふ又慈悲にも似たり」子供の事だけしか思はなかつた。自分を捨て、居るのだから、これは慈悲といふものに相違ない。その子供を思ふ心持を移して、一切の人を思ふといふことになれば、佛が一切の人をお救ひになるそのはたらきに近い事も出来て来る。「かるがゆゑに佗事なけれども天に生るゝか」さういふ心持であれば佗に善い事をしないで天上界に生れるといふくらゐな善根を積む、善い事をして行くことが出来る。たゞ自分の心の持ち方であります。

又佛になる道は華嚴の唯心法界三論の八不・法相の唯識・眞言の五輪觀等も、實には叶ふべしとも見へず。但天台の一念三千こそ佛になるべき道とみゆれ。此一念三千も、我等一分の慧解もなし。而れども一代經々の中には此經計り一念三千の玉をいだけり。餘經の理は玉に似たる黄石なり。砂なしぼるに油なく石女に子のなきが如し。諸經は智者猶佛にな

らず、此經は愚人も佛因を種べし不求解脱解
脱自至等と云云。

そこでそんなら子供を思ふ心持を養へば佛に成れるといふのだが、佛に成る修行はどうして修行するか。それは佛様に成りたいと思ふならば、佛様の眞實の心持を打明けられた教に依つて修行するより外ない、これは極く簡単な理窟であります。譬へば菓子屋へ行つて、何か一番良い菓子はないかと言つた時、その店の主人が、これが特別ですと言ふのを買ふが宜い。料理屋へ行つて何か美味いものはないかと言つた時、其處の料理番の一番得意な、これなら美味いと請負つたものを食べれば美味いに相違ない。それを素人料簡で、私の店では天扶羅が一番美味いと云ふのに、イヤ、俺は刺身が好きだと言つても、それはいけない。その店で食べるのに、どれが宜いかといふ時には、それを拵へる人の意見でこれが一番宜いといふものを食つたら宜い。これは極く淺薄な譬へだけれども、同じ事です。吾々は凡夫であつて、佛様に近くなりたといふのだから、佛様がこれなら確だ、これなら自分が本心を打明けたのだから、これで修行しろと仰しやつた。それに依るより外ない譯であります。それを素人料簡で、佛様は法華が一番だと仰しやつたが、例

も、他のつまり法華經を中心としない方の信仰といふものは、これは後世の者が自分の好き嫌ひで決めた信仰の中心であるのだから、それは頼りにならぬ、佛の教を學ぶならば、佛様のお決めた道に依つてやるほど安全なことはないぢやないか、斯ういふ事を言はれるのであります。

それで華嚴經を讀んで見ると、華嚴經の中には「唯心法界」と説いてある。唯心法界といふのは、自分の心一つで以てどういふ境界も開けて来る、斯ういふ事が説いてある。それは嘘ではない、本當であります。自分の心の持ち方が平なら平和な世界が開けるし、自分の心がむしやくしやして居れば、毎日をいら立つた気分を送らなければならぬといふことは本當だけれども、併しそこを讀み違へてはいけない。唯心法界といふことは善いことだが「實には叶ふべしとも見えず」佛にまでは成れないといふ。無論華嚴の教といふものも相當に役に立つ。華嚴經を讀んで見ると、華嚴經は實に善い事が説いてありますから役に立たぬとは言はない。阿彌陀經を讀んでも、阿彌陀經もやはりお経だから善い事が説いてある、役に立たぬとは言はない「叶ふべしとも見えず」これだけ以て修行して本當に佛にまで成れるかといふと、それは難かしい、途中まで行けるだらう、斯ういふことで

だか法華は氣に入らないといふのは、天扶羅屋に行つて天扶羅は嫌いだと言つて食はないで、菜漬で飯を食はして呉れと言ふと同じ事でありませう。さうして美味くないと言つてもそれは當人が悪い。其處へ行つたら其處の一番良い、其處の請負ふものを求めるのが一番宜いでせう洵に俗な譬ですがその通りであります。佛教を學ぶならば佛様のお心持に違はなければいけない、何故なら佛様が本當の覺つた事をお話下さるのだから、その佛様の仰しやつた事を差指いて、自分の料簡で、お釋迦様はさう仰しやるけれども何だか氣に入らないから、こつちの方が宜からうと、自分で勝手に選り好みをするといふことはつまらないことでもあります。凡夫の考を以て佛様の考を批判するといふことの出来るものではない。それだから日蓮上人がナニモ自分が一番初めから天台宗の坊さんだから法華經が良いと仰しやつた譯でもなんでもない。日蓮上人は十二歳の時から三十二歳の時まで一身を捨てて研究して、その結果佛様御自身が法華經に魂が籠つて居ると言はれて居るのだから、その佛様のお心持に基いて、法華經を御自分の信仰の中心としよう。斯う思ひ定められたのでありまして、自分といふものを捨て、佛様のお考に基いて、それでこの立宗が出来たのであります。だからいふ／＼な宗で、それ／＼宗を立てて居るけれど

あります。だから決して日蓮上人は他のお経は役に立たぬと仰しやつたのではない。それは相當に役に立つたらうけれども、それだけに依つて修行したのでは佛様に成れない。いゝ加減な覺りしか得られない。いゝ加減な役には立つたらう。そのくらゐなものです。そこを能く考へなければいかぬ。斯う言はれるのであります。日蓮上人は狭い心持で、法華經以外の經典は一切駄目だといふやうなことは仰しやらない。それはそれ／＼價值がある修行すればそれ／＼の役に立つだらうけれども「實には叶ふべしとも見えず」これだけで佛に成るまで行けるかそれは難かしい。途中までしか行けはしない。斯ういふのであります。

それから又三論宗の方では「八不」といふことを言ふ八不といふのは八不中道と言ひまして、人間の心はどつちにも偏つてはいけないといふのであります。この八つを一々説明する必要もないと思ひますが、物は始終變るといふのも一つの觀方。變らないといふのも一つの觀方變る／＼といふ變る方だけ見てはいけない、變らない變らない、何でも變らないと思つてはいけない、といふやうな風に、右に偏らないやうに、左に偏らないやうに、中心の偏らない所を捉まへて行けといふのが三輪宗の八不中道といふことであります。それも宜い、それも成程

有益な教に相違ない。けれどもそれだけでは佛とは何ぞやといふ大事な問題はまだ解らない。マア吾々の心がどつちにか偏るのを防ぐだけの話、それも有益な教だけれども、それだけで以て佛に成れるとは言へない。

又相法宗の方では唯識といふことを言ふ、唯識といふのは自分の心の持ち方一つといふことであります。「識」は心の持ち方といふこと、心の持ち方一つでどんな境遇の中でも通つて行けるといふことを徹底的に説くのがそれが法相宗の唯識であります。これも尤であります。成程さうです。けれども心の持ち方一つだけだといふのは佛に成れない。何故なら幾らどんなに考へても自分の心の力といふものには限りがある。この自分が佛様の眞實の教に歸依することに依つて佛の絶大なる大きな力を吾々の心に通はせなければ自分は佛には成れない。自分の料簡だけで一番善い事を考へても、その一番善いといふ人間の考には限りがある。吾々の考でこれが一番善いと言つても、その一番善いといふのは自分だけの一番善いのだ。モツと上がある。それだから誠心を以て佛に歸依するといふことをしなければいけない。あなた方もお聞きでせうが「心だにまことの道にかなひなば祈らずとても神やまもらん」といふ歌がありますが、こんな眞實なことはない。これは普賢道眞公の歌だと云ふが、普

は大事だけれども、自分一人の心の持ち方だけで終つてはいけない。小さい自分を捨て、誠心を以て佛の教に歸依するといふしほらしい優しい心持がない以上は、幾ら自分の小さい料簡で考へても、それだけで本當に教はれるものではない。斯ういふことを言ふのであります。法相、如く唯識だけ言うてもいけない。

眞言の方では五輪觀といふことを言ふ。五輪觀といふのは地・水・火・風・空であります、この五つが集つて天地萬物になり、又それが人間にもなるといふことを説くのが眞言の五輪觀であります。それも一種の世界觀人生觀といふものを説明する上に於ては面白いことであります。成程さうも思はれる。けれどもそれだけでは佛様のお慈悲といふものは十分に説き現はされて居ない。それも役に立つがそれだけで叶ふべしとは思へない。佛に成るといふ大目的が達せられるとは思へない。

但ださういふいろ／＼な説の中に於て、天台大師が言はれた一念三千といふことは、これはどうも佛に成る道能く明かに示されたものと思はれる。この一念三千といふことは今までも幾度も申しましたから簡単に致しませんが、要するに吾々の心の中に佛に成る性質もあれば地獄に墮ちる性質もあれば、又餓鬼道に墮る性質もありこの一念の中に有ゆる心のはたらきがある。斯ういふこ

原道眞公の全集を見てもそんな歌はない。これは徳川の元祿時代の學者が詠んだものです、自分達が拵へたというては價値がないから、普原道眞公の歌だと言つて居るが、道眞公の歌を集めた昔家歌集には何處にもない、道眞公といふ方はあんな馬鹿な歌は詠まれない。「心だにまことの道にかなひなば」といつたつて、自分達の考でまことの道を見出さうというても出来はしない。自分で考へてこれがまことの道だと決めて、これさへやれば神様も護つて呉れさうなものだ、護つて呉れないのは神様の方が悪い……喧嘩づくでは信仰にならない。まことの道を知りたければ自分の私を捨て、信仰しなければならぬさうすることに依つて初めてまことの道が解る。それをまことの道を自分で決めて置いて、この通りまことの道をやつたのだから神様も守護して呉れさうなものだが、御利益がないのはどうしたものだらうと言ふのは飛んでもない話であります。さういふ取引ではいかぬ。理窟づくで以て佛様にいろ／＼な事を強要して、これだけ正直にして居るのにどうして護つて下さいませぬと喧嘩をしても始まらない。自分は完全なものではないのだ。その自分を捨て、佛の眞實の教に歸依するといふことをしないで、たと心一つの持ち方でどうでもなると言つてもどうにもならぬのであります。成程心の持ち方といふこと

とであります。ところがそれだけなら一種の哲學であります。哲學と宗教の違いを知らなければいけない。それだけなら一種の哲學であります。自分の心の中に佛に成るやうな慈悲の心持もあるのだ、人を殺すやうな、人の物を盗むやうな心持もあるのだといふのは一種の哲學であります。理窟です。ところがその理窟が解つたつて吾々は中々佛の境界に達することは出来ない。そこでその一念三千といふ天台の教の中心を成すものは何だと云へば、佛に歸依するといふことである。佛に歸依することに依つて佛と成るべき吾々の本性が初めて本當の力を持つて来るぞといふことであります。それを抜かしてしまへば天台の一念三千といふ理窟はたゞの理窟になる。甚だ悪口を言ふやうですけれども、徳川時代から以後の日蓮宗や法華宗といふ宗派の人が、あれを理窟として取扱ふ。だから三千といふのは十に十を乗けて千、それに三

を乗けて三千……といふやうな算盤勘定みたやうなことばかり言つて居る。それでは佛に成ればしない。さういふやうに人間には佛に近い心持がある、その心持をどうして育て、大きくするかと云へば、誠心を以て佛を信じなければならぬ。

これは日蓮上人が言つて居らつしやる。吾々の心の中にあるところの佛に成る尊い性質と佛様が吾々をお教へ

下さるその力が通ひ合はなければいけない。

ちやうど籠の中に鳥が一羽居る、目白なら目白が居るさうすると空から大きな鳥が飛んで来てピー／＼と鳴くと籠の中の鳥も又ピー／＼と鳴く。その籠の中の鳥が鳴くと張合があるから空の鳥もなく、すると又餘計籠の中の鳥も鳴く。さうしてお互に上と下とで鳴き交し／＼する間にその部屋全體がその鳥の聲で一パイになつてしまふ。それと同じ事でありませう。吾々の心の中にあるのはちやうど籠の中の鳥のやうなもので、佛性即ち佛に成る性質であります。それで空から鳥が来たといふことはそれは佛の教法であります。これが鳴き交し、呼び合はなければならぬ。吾々が教はれたいといふ心持と、佛様がお教へ下さるといふその慈悲の心持とが兩方通ひ合ふこちらは籠の中の鳥のやうに一生懸命求める、さうすると佛様がちやうど空から来た鳥のやうなもので、大きな聲で呼び掛けて吾々に教を興へて下さる。その空の鳥と籠の中の鳥とが呼び交はし／＼すると同じやうに、吾々の道を求める心持と、佛の尊い教とが相感して、さうしてこちらが有難いと思へば、その有難いと思ふ心持に感じて佛の力が一層加はつて来る。所謂感應する。感ずるから應ずる、應ずるから又感ずる、有難いと思ふ力が加はる、力が加はれば餘計有難い。モウ一層一生懸命にな

る、又その力が加はるので感應する。感じて應じて、又感じて應じて……始終繰返し／＼して行くのであります。自分は今凡夫でありまして自然々々に凡夫の境界を離れて行くことが出来やう、斯ういふ事を日蓮上人は教へて居らつたのであります、それでなければいかぬ。

それだから天台大師の一念三千といふものはさういふ風に解釋しないといけない、たゞ自分の心の中に佛と同じ性質があるのだから俺は偉いものだ……そんなことを考へたのでは一念三千も何も解つたものではない。それで斯ういふやうな御本尊を置いて、本尊に對して信仰を勵むといふことが必要になつて来る。たゞ自分の心で考へて俺は佛に成れるのだといふなら、本尊も何も要らない。一人で坐つて考へたら宜い。けれどもさうは行かない。自分の力だけで行くものではない、だからそこで誠心で佛に頼んで、佛を信ずることに依つて佛の大きな力と自分の心にある佛性とが通ひ合ひまして、そこで初めて今は凡夫でありまして佛の境界に近づいて行けるのであります。これが「天台の一念三千こそ佛になるべき道とみゆれ」といふことであります。

併ながら「此一念三千も我等一分の慧解もなし」自分達が一人で考へて居たのでは、その天台大師の言ふやう

な一念三千といふものの本當の意味を理解することは出来ない。そこで「一代経々の中には、此経代計り一念三千の玉をいだけり」その天台の教が本當に解るやうになりたければ、天台の本だけ読んで居てはいけないといふこれは大事な所でありませう。天台の本を毎日読んでも一念三千は解りはしない、理窟は解るけれども、眞實の事は解りはしない。どうすれば宜いか、有ゆる經の中に、「此經」法華經を讀め、法華經を讀んで、法華經を信じて法華經の中に現れたお釋迦様を誠心を以て拜み、誠心を以て歸依する。斯ういふ時になつて自分の心が明るくなつて来て、天台の言ふ一念三千といふことの眞意はハ、斯うかナと解つて来る。それを法華經を信ずるといふことをしないで、たゞ天台の本を繰返し／＼讀んで理窟ばかり控ねて見ても解りはしない、これが日蓮上人の斷案であります。甚だ悪口を言つて濟まぬけれども、徳川時代から以後こゝをやらぬやないか、たゞ天台の本ばかり讀んで十と十を乗けて千、それに三を乗けて三千といふやうな算盤勘定ばかりやつて居る、これは蜘蛛の巣學問といふもので何も解つて居ない。それだから法華經を幾ら讀んでも信仰といふものは出来はしない。そこを日蓮上人はハツキリ言つて居る。幾ら天台の一念三千といふものの理窟を覺えたと言つても、理窟だけでは解ら

ない。自分の心に迷ひがあつて、小さい自分に執はれる心持がある間は幾ら本を讀んでも解らない。一切の經の中にこの法華經といふものは佛様の魂を籠めてお説きになつた法華經だから、この法華經を讀誦することに依つてこの法華經の中に現れた佛様を信じ、その佛を信ずることに依つてそこで初めて自分の心の迷ひが除れて、小さい自己に執はれるやうな淺ましい心持が無くなつて来た時に、天台の言ふ一念三千といふものは成程こゝだナといふことがスツカリ解つて来る。斯ういふのであります。どうもこれは理窟だけではいけません。人間の心といふものは成程理窟を言ふやうな場合もありませうけれども、感情といふものもあれば、意思のはたらきといふものもあるもので、たゞ理窟だけ解つたからそれで行ひが出来るものでない。

そこで本當に自分の佛に成るといふ道が知りたいならば、「一代の經々」お釋迦様が五十年、六十年の間お説きになつたお經の中で「此經」この法華經を本當に信ずる、法華經を信じて、さうして天台の教を聞いた時に、初めて天台の言つたことが成程こゝだナといふことも理解が出来「此経計り一念三千の玉をいだけり」天台が一念三千と云つた尊い教がこの經の中に入つて居る。この法華經といふものを捨て置いて、たゞ天台の言つた

事の理窟は何か、さういふことばかり如何に組んで見ても、たゞ學者になるだけ、物知りになるだけで、本當に自分の心が佛と一致するといふ所には行かない。

それで他の經の中に説かれたものは玉に似た黄色い石のやうなものだ。何故なら方便の教だ、佛の眞實のお心持をまだ打明けて居らつしやらないのだから、法華經以外のお經を讀んだのでは、玉のやうに美しく見えても本當の玉ではない、まだ／＼至らない所がある。砂を搾つても砂、油は出ない、菜種を搾れば初めて油が出る。それと同じで、佛様の本當のお心持を打明けないお經を讀んで、幾ら詮索しても、それは相當に智慧は出来るだらうし、相當に役に立つたらうけれども、佛様と同じになるといふこの目的は決して達せられるものではない。そこを一つどれが重いかどれが軽いかといふ輕重の區別といふものを明かにしなければならぬ。『石女 即ち子供を産むことの出来ないやうな女は、いつ迄經つても子供は生れないと同じである。だから『諸經』法華經以外の經を讀んだだけでは、縱ひ智慧の如何程優れて居る者でも佛には成れない。智慧は發達するだらう、相當な覺りは得られるだらう。併しながら佛様のお心持がスツカリ打明けられて居ないお經だけでは、かなりな所までは行つても佛には成れない。ところが『此經』法華經を本當

たり、或る時はこれだけ言うて居るのにどうして解らないかとむしやくしやする。又或る時には當分いゝや、その内やらうと氣が緩んだりする、さうして急ぐ時は無暗に急ぐ。時々私は自分を省みて非常に恥かしく思ふのでありますが、實際信仰を勵んで行く上に於ては急がす弊らず、解説を求めざるに解説自ら至る。斯ういふやうな心持で以て一歩々々と凡夫の境界から佛の境界に近づくことを理想として行かなければならぬ。この事を日蓮上人は始終自分の弟子に教へて居らつしやる。(次續)

に信すれば、今まで愚かなやうに見えた者でも自然々々に佛のお力が自分の心に通うて来るから、佛に成る種を植えることになるのである。『解説を求めざるに解説自ら至る』と涅槃經の中にあるのはその意味である。急いではいけない、懈けてはいけない。『解説を求めざるに解説自ら至る』といふのは良い言葉であります。急いではいけない、今日覺りたいと言つても、今日覺れるものではない。この頃俺も大分覺つたといふのは神經衰弱が何かで怪しい、そんなに簡單に覺れるものではない。求めざるに自ら至ると法華經にあるやうに、始終信じて、始終考へて居れば、知らず識らずの間に心が明るくなるのでありますから、急いでは駄目であります。併ながら懈けてもこれは駄目です。急がす又怠らず、だん／＼やつて居る間に求めざるに解説自ら至る、無理に凡夫の境界を離れて救はれようと思はないでも、信心を勵んで一生懸命やつて居れば解説自ら至る。自然に凡夫の境界を離れて明るい気分になり、心が喜びに満ちて、心に大きな力が具つて来る。決して急ぐべきものではないと共に、又決して懈けてはいけないのであります。

斯ういふことは實際信心をする上に於ては大變大事な心掛けだと思ふ。無論私なども人の前ではこんな理窟を言つて居りますけれども、兎角急いで見たり、懈けて見

勝つたつめに
二百卅億貯蓄

本日生命



本佛實在の宗教哲學(十四)

河 合 陟 明

十二、一念三千の興廢

摩訶止觀第五に云く、

夫一心具十法界、一法界又具十法界、百法界、一界具三十種世間、百法界即具三千種世間、此三千在一念心、若無心而已、介爾有心即具三千、此不思議境何法不攝、此境發智何智不發、依此境發誓、乃至無法愛、何誓不具、何行不滿足耶。若離三諦、無安心處、若離三止觀、無安心法、若心安於諦、一句即足、如其不安、巧用三方便、令三心得安。

智者大師一期の思想發展史、とくに晚年開講の法筵において、まづ法華文句における因縁・約教・本迹・觀心の四釋、就中その觀心の宗教的意義と歸結なるところのものより、さらに法華玄義に發展して、その名・體・宗・用・教の層々五重に開展し、本迹二門の二十妙にわたる諸思想を一貫して、彼の教觀の二大主流たる無相の法性と久遠の佛果、就中その基調を形成する法性一實の諸理、したがつて迹門十妙の隨一に掲げた境妙を、さらに爾餘一切の諸妙および權實本迹等の諸概念と關聯せしめ、これを背景としつゝ、これら一切の綜合的・大教理體系として構成したるものが、すなはち摩訶止觀における宗教實踐の精粹として展開したる、十境十乘一心三觀と稱する觀心の對象として、その十境の第一陰入境に對しその十乘觀法の第一に掲げた觀不思議境としての一念三千であるのである。元來理境は種々な方面より考察せられるが、その整束は三諦であつて、これは天台の教觀二門を一貫して實在の根本原理と考へられたるものであるがゆゑに、彼れの實相論はまさに三諦論といふべく、すなはち「夫三諦者、天然性徳」なるもの

であり、その一空萬假を攝する中道三諦を開いて、こゝにまづ十界の人格實在とその相關互具とを論じ、以て百界の數を成するのである。いはゆる十界即空即假即中なるものである。つきにその實在の活動作用については、それを律する内面的必然の法則性として、十界普通の不變的形式たる十如因果の屬性を開出するのである。この十界十如とは、これすなはち宇宙の實體にして且つ己心の主體たる一大真如法界の根本性すなはち法性を意味するものであつて、こゝに宇宙萬有の不變平等なる理的・本體性と隨縁差別的なる現象の事相とが根據するのであり、而してこの十如是の關係は前後正確の聯絡を保つて相違することなく、また何物も左右し得ず、これ宇宙生命の絕對意志たるところであるのであり、而してこの一絕對に根據して一元的なると共に多元的無限なる個體的獨立の十界の諸人格は、おの／＼自覺的自由なる行爲の主體でありつゝ、且つその内面的普通の超個體的根柢および法則たる、この一大真如の十如因果の大規律によつて動くものであるから、先の百界にこれを乗すればすなはち千種の因果關係を生じてこれを千如と稱するのである。同時にこの十如の法則を主觀的にいふならば、それはすなはち認識の範疇となるものである。さらにその十界の活動の表現性として、個人と社會と自然界的國土とに關聯する三世間を開出し、以てこの三世間は百界千如におの／＼具備するものなることを示して、こゝにすなはち十界五具・百界千如・一念三千と稱するところの實在體系を構成するに至るのであつて、しかもかゝる全宇宙の實體を全く自己の一念の己心に包攝したのである。

かくして三千とは、宇宙に實在せる十界と、その間の本體的互具および精神的感應なる緣起的相互關係と、その十界共通の、また十界中の一界の、またさらにその一界中の一己身即ち個體人格の等、そのあらゆる因果關係と、その十界の各界それ／＼多數者の存在ならびに相互限定作用をなす關係、またその各自の身體・感覺・思想・行爲・心識等の相違、すなはち個々人格の自覺と自由とさらにこれに必然法則の加はり來つて可能性が具體的現實となるところの知的・行爲的差別と、さらにまたその所任の處たる國土世界もまた多様なる、しかもそれは單にの individual の感性界のみにおけるものでは勿論なく、形而下はもとより、とくに形而上的存在界をも含む全宇宙、いはゆる法界に遍きところの人格的無限の交渉、およびそれに依隨すると共にまたその人格的存在の依つて立つところ・於てある場所としての國土の關係等、この總てを一貫して玄妙の状態を認むるものであつて、これを一言にしていへば即ち宇宙の實相であり、萬有の本體および活動であり、しかも先にもいつた如く、この宇宙の全體と吾人の一念との關係を見るに、

我等の妄想の一念にもこの大宇宙の全體を包摂せるの妙を具してゐるのである。ゆゑに天台は介爾有心、即具三千と釋してゐる。これを諸法實相といひまた妙法と呼ぶのである。

今一たび約言すれば、これすなはち萬有諸法の體用因果を綜括するものであつて、一切の存在におけるその實在と作用と表現と、換言すれば、「ものとはたらしきとありさま」の三者を盡し、またはその存在性と成立の由來と現實の狀態と、したがつてその過去より現在への結果的認識と、さらにその現在より未來への推移における可能的方向をも、その十界互具といふ普遍的實在性の内容と、自己の時々刻々念々における自由に於て必然なる具體的行動の法則性と隨つて、これを豫測せしむるものである。

さればかゝる組織構成の所以に關しては、妙樂すでに指摘せるが如く、これを横に配列するときは、於一念心、不約十界、收事不遍、不約三諦、攝理不周、不語三十如因果不備、無三世間、依正不盡（止五ノ三）とし、すなはち事理・因果・迷悟・依正といふ、整備せる實在のおよび價值的範疇概念によつて把握せられたる宇宙の全存在の、不離一體の相即融妙の關係を見るものであつて、こゝに小乘の業感緣起・唯識の阿賴耶緣起・起信の眞如緣起・華嚴の法界緣起・法華の佛界緣起また阿含の生滅四諦・般若の第一義空・維摩の不思議解說・大集の染淨虛融・華嚴の十支無盡・涅槃の佛性常住・法華の諸法實相等、佛敎の諸教理および諸教系を綜合し、またこれを縱に開展するときは、實相必諸相、諸相必十如、十如必十界、十界必身土（金鉢論）といふ、いはゆる實相四必と稱する推論式的發展を示して、こゝに實在の諸問題を説明せんとするものである。いはゆる具體的一般者とその自己限定作用といひ、あるひは自覺的體系の發展といひ、あるひは歴史的社會的なる人間存在の問題といひ、あるひはすなはち現代哲學の一大主流たる人間學において關心の對象たる、宇宙における人間の地位の問題等といはるゝところのものも、この一念三千といふが如きまさに法界哲學と稱するを妥當なりといふべき哲學體系の、廣大なる絕對法界的背景と關聯性との場所において、かつ内容において、眞にその意味と解決を見出だすところのものでなければならぬ。

しかるに由來一念三千の觀法とは、先驗的本有無作なる性具三千の一大法性が、とくに價值的には十界性の互具一體の中においても就中佛界の性相が、したがつてまたその佛界の性相といふもすでに現實に經驗的完成なる極果極證の事的人格の佛陀を指すにあらすして、先驗的・理的佛性すなはちいはゆる法身論中の三身として、嚴密なる意

味においてはたゞ原理的たるにとゞまるところの無作三身としての本有の三因佛性そのものが、無明によりて限定せられたるところに九界の妄現象を生じ、それをとくに宗教的實踐の對象としては始自凡夫正報、終至聖人方便（止五ノ一）ところの十境となり、したがつて此十境通能覆障するものであり、しかもその中においても就中、——これを認識論的にいばゞ感覺の對象として、これを實踐哲學としていはゞ當爲の内容として、前者はカントのいはゆる

Smith's Moral Philosophy、感覺的雜多性の所與といふべく、後者はフイヒテのいはゆる Natur、自然は Pflicht、義務の感覺化といふべく、したがつてそこに人間としての Beschaffenheit、本分があると共に、又ヘーゲルのいはゆる

Sittlichkeit、運命も存すといふべく、しかもまた西田哲學にいはゆる Selbstakt、運命は Aufgabe、課題なりといふべく、かくして現實に對する了々たる諦觀と深甚なる反省のもと、その Tob und Linderung、克服のための idealistische Streben、理想主義的努力を展開するときは、いはゆる悲劇的意味において見らるゝところの Selbstakt、運命も、つひには Heiligens Wonne、宗教的法悦の内容として、また Göttliche Wirkensweise、悦ばしき智慧の對象としての Selbstakt、賜となり Götterreich、恩寵となるに至るべきところのものとして、こゝにすなはち天台智者の説くところの——陰入一境

常自現前、若發不發恒得爲觀、又行人受身誰不陰入、重擔現前するものなるがゆゑに、まづこれに對して實踐的修行を始め自覺的反省を凝らすとき、こゝにこの根塵相對の陰妄の一念に全法界を備足して寸毫も缺くるなき玄妙不可思議の眞相を直觀體驗せんとする、すなはち觀不思議境としての反省的内觀が成立つに至るのである。ゆゑに十乘觀法と稱する觀心の修行を通じて、その反省の契機は毎に安心であり、その直觀の内容は毎に佛性であり、法性であり一心眞如の理海に歸入するのであつて、直爾に我れが極果の佛陀に躍入するものでなく、直ちに極果の智慧に接觸するものでなく、はたまた極果の如來・智慧の佛陀も直ちに我れに感應の働きを爲し來たるものでなく、眞に宗教實踐の境界において却つて直接の對象となるのではない。たとひ本尊を設けるとも畢竟内觀の修行を助成せんとするの助縁に外ならぬ。況んや四種三昧の本尊に至つては、行門を別にする毎に本尊を異にしてその歸一を示さす。

すなはち止觀において正修觀法たる十境十乘一念三千の觀心にさきだち、大意より旨歸に至る十章の第一たるところの、いはゆる十廣五略の五略において、その修大行の略説たる四種三昧とは、常坐と常行と半行半坐と非行非坐と

の四種の行法を指すのであるが、一は文珠問・文珠設の兩般若經に基いて一行三昧とも稱し、二は般若三昧經に依つて佛立三昧とも稱し、三は方等經および法華の結經たる觀音普賢經との二經に由つて、方等三昧あるひは法華三昧とも稱し、四は諸經行法、上三不攝者、即屬隨自意也、しかもとくに大品般若經によつては覺意三昧とも名け、師南岳の稱ふるところによるときは隨自意三昧とも名くるのである。而して若所緣理、名二行者、四行莫不皆緣實相、ゆゑに四種三昧、方法各異、理觀則同、この法性一理の實相を證得せんがために、あるひは釋迦を念じ、あるひは彌陀を念じ、あるひは觀音を念じ、あるひは普賢を念じ、しかもかゝる事行は悉く唯理の觀の *contemplation* 助手たるのみ、目的とするところは凡て中道法性の觀解にあり。

有慧無定、如風中燈、照物不明了、故用三定室、離三狂散風、慧燈方破、無明大暗、使三實相實、顯了可見(止二ノ三)

若但解方法、所發助道、事相不能通達、若得三理觀意、事相三昧、任運自成、ゆゑに妙樂これ一言に釋して云く、

問、常坐、觀於三道等、當行、觀佛三十二相等、方等、觀於摩訶袒持尊容道具等、(摩訶袒持陀羅尼、顯爲大寂要道、惡持善、祕要祕是、實相中道正空)法華、觀於六牙白象等、隨自意、觀於善惡及無記等、四觀各別、何名爲同、答、此並約於、所歷事一說、若能觀觀、無非二心、所緣之理、莫非三諦、是故得云、理觀同一也。(止二ノ五)

佛陀すら助道の方法としての事相に過ぎず、かくて信仰の對象といひ、本尊の感應といひ、雜亂不規律にして適從するところなきに至つた。否そも、これにはさらに深い因由が存する。天台ないし妙樂は

問、十法界互相有、爲因爲果、答、俱相有、法爾而然、一念因心、道理具十、一界之果、豈當二界、然言一果具於十果、從三事理一說、即十界果、各具二十果、是則一一界果、各各具十、不互相混濫。一往從見、且云因通易知、及以三果隔難顯、理而言之、一念因心、實具十界百界因果、當知一念恒具、百界依正因果。又復學者、縱知內心具三千法、不知我心、遍彼三千、彼々三千、互遍亦兩皆止五ノ二と論じ、ないしすでに陳べたる如く、芥爾有心即具三千と説きながらも、佛陀はつひに久遠の有始に止まつて、無

始の實在にあらす。こゝにおいてか智者大師が晩年うたへ眞熟玲瓏の心境に入り、その畢生の *Shinji* *Shinjin* 構想力を凝らして築大成せし古今獨歩の妙觀たる一念三千も、果然、本有の實相にあらす、無始實在の論理としては一念三千を成立せしめず。たゞ久遠有始・最初成道の始覺佛が、「本無今有の十界互具」を設けりとなるのみ。無始においては唯開濟たる九界の迷者存するのみ、十界互具の實なし。そも、この蓋爾たる億萬の群生は何によつて救はれるや?! しかのみならず此處には絕對の主師親三德の大恩徳主・大靈格者を認むるなく、法界の本源においては何等の尊敬すべきものなきに至る。

元來妙法實相とは、十界互具を根本原理となすものであつて、その十界互具を二分すれば迷界と悟界とであり、したがつてこの迷悟の關係・轉説變化の可能如何を推究して、これを組織的に展開したるものに外ならぬ。その必須の中心は實に悟者の實在そのものに在つて存する。しかるに徹底嚴密なる論理を遂うて、苟くも極果事常なる人格的現實の無始佛界の實在なるものが立たざる限り、十界互具は全く中途よりの成立即有爲に屬し、すなはちたゞ中間的假相たるにとゞまり、本有の狀態としてはこれを認むること能はず。本無今有」とは哲學的眞理の致命傷にして、これに實在論上と認識論上と生成論上とあり、しかも三面は互に相依るものである。しかるに天台はこの三面共に失す。たゞわずかに本體論上の本有無作を得たるのみ。そも、一佛の開覺成道といふ有始の始覺が、どこまでも唯だ有始の一點にとゞまり、したがつて唯だ未來常においてのみその生命を保つ外なきものであるならば、それはどこまでも唯だ部分的認識たるに終る外なく、またもとより部分的實在たるに終る外なきものであつて、時間的制約を完全に超克すること能はず。したがつてかくの如きものは無上善提すなはち絕對の覺りとしての認識の無限性と、事圓の佛果すなはち常恒の恩徳としての無始無終の救濟性とを、共に圓滿完全に究極したといふことはできない。また有始の始覺がいち唯の無作の本有なる眞如理本覺に合して始本不二となり一如に歸し、つひに始本共に亡するに至つたといふことによつて、佛智と佛果を究極するといふものでもない。しかも從來の佛敎史上に現はれた諸宗と學派と敎系とを通じて、佛陀論の死命を制する始本二覺論は、ほとんどこの二種の見地以上に出てをらぬ。未だ十全なる最後の解決として眞に普遍妥當なる絶對完成の佛智の認識と佛果の實在とを示さず。すなはち眞に合理的にして何等の獨斷を許さざる哲學的根據に立ちつゝ、しかも遍在・全智・全能なる超人格的大靈格者の常任不滅なる絶對の救智と神祕

の救済とを説き得ず。

さらに換言すればそれはすなはち、根本實在として超時間的 *Vergangenheit* 先歴史的なる眞如法性の理と、さらに一層高次の超時間的なる *Endenitiche* 終歴史的佛果菩提の智との、理事二面の、すなはち實體的と人格的との、二重の意味における *Ewigkeit* 永遠性そのものに立ちつゝ、しかもその現實の成立性を因果によつて説かしむるものであらねばならず、かつしかもその有始といふ有限の制約性を脱却して、無始の實在たるものであらねばならず、さらにしかも無始の現實の眞智的絶対の超時間性の意味においては、無始に既に何等の時を見ず、時を有たず、時を要せざるものでありつゝ、しかも無始以來常に全時間的・全法界歴史的大活動に出て來つて、人類世界の *gesamtheitlich* *Auf und Ab* 歴史の浮きつ沈みつを、否たゞに人類世界のみならず、九界迷妄の一切衆生界の浮沈・興亡・順逆・消長を、常恒に照鑑し無窮に救済する眞の絕對者・眞の神・眞の佛陀・すなはち眞に無始本果妙上より發し來たる無始本佛の本覺と本願なるものを、未だほとんど示したるを見ない。

もし一步を譲つていはゆる一念三千を、先驗的・性具三千の法性論として、「無作の本有」としては或は成立するやも知れざるも、それは單に未だ非人格的なる根本原理たるに止まり、斷じて人格實在に非ず、すなはち經驗的・現實的・現象としての「無始本有」なる事體常住の三千實相に非ず。唯理眞如の法身的普遍なる根本實在なるのみもの、すなはち超個人的・非人格的・根柢原理たるのみに過ぎざるものと、無始無終の一事成にしてかつ「事常」なる具體的・現實的存在としての迷悟二者、すなはち反價值的九界と價值的佛界といふ十界の人格實在とは、決して混同するを許さず。就中、たゞ法身常住の理佛と、報應顯本の事常の佛界なる覺者の人格實在とは、斷じて混同することを許さず。またさらに事常十界の全體すなはち隨緣眞如そのものと、その中の一部にして、すなはち一界として、しかも「隨緣眞如を全く自己の内に見、自己の内包み、自己の内統覺するところの、報應當住の事體の佛界とは、これまた斷じて混同することを許さず。廣漠たる從來の佛敎史は比々としてほとんど皆この謬に墮す。これ皆一に眞正嚴密なる本佛實在の論理を明かならしめ得ざりしに由る。(つゞく)

南無妙法蓮華經

昭和十七年七月 恩師の圓寂に因むの日 太平洋岸 本化刹頭の救觀發祥の聖地において。

大東亞建設

本 聖 院

むかし印度摩伽陀國の頻婆娑羅が未だ王様にならない時、五つの請願を立てた其の四つ迄が、聖者と道法に關してであつた。即ち「若し自分が王位を得たる已後、願くは我が化内に、佛世尊有つて天下に出現したまはんことを。若し佛の世に出現したまはん時、願くは我れ自身に承事供養せん。若し承事し得たる已後、唯願くは我が爲に應の如くに説法したまはんことを。佛若し我が爲に法を説きたまはゞ、我れ法を聞き已りて、願くは誘毀する莫く、法を證するを得已りて依つて奉行せん」と。

夫れ國家を興隆せしむるには、國民の人格を向上せしむることが根本義である。人格を向上せしむるにはどうしても明教を興へ、その信仰を策勵すべきである。不信の者は五欲の爲に惡業を重ね、その報として苦しむのみならず周囲を惡化せしめる。信仰は佛智即ち菩提を得ることであり、解説して現在を淨土化する。佛法はお葬式が主眼でなく、活ける人等を引導し、度世の要道を開示する現安後善の妙法である。故に釋尊の御在世には、印度十六の國王始め、大臣百官長者居士等の求道熱誠を極めたものであつた。かゝる立派な教を捨てたから亡國の嘆を見ることになつた。「佛法とは道理なり」と日蓮聖人は仰せられてゐる。

東亞十億の民衆には、種々雑多の宗教が尊重されて居る。その各々をして正しく善導し、心から信伏せしめんには、先づ我等一億の反省自覺に因つて範を事實に示すことが最も大切と思ふ。徒らに自貢慢心強盛で、優越感を發揚することは禁物である。不輕菩薩の態度に學び、國內が到る處常樂我淨の風そよめき、我を捨て、公に奉じ、自身を苦しめても、他人を利せしむる菩薩の精神を心として行動する時、獨り東亞のみならず新世界の建設は自ら完遂期すべきを確信する。

孟蘭盆供 孟蘭盆經又は報恩經とも稱へられてゐる通り、此の行事は単に先祖に對する追孝供養ばかりでなく、君國の報恩の行でもあり、衆生恩への報謝でもあり、天地三寶に對する佛事でもあつて、殊に大東亞戰下に幾多の彼我陣病死者の爲に、私共は心から冥福を祈るべく、七月十二日の日曜日午後二時より莊嚴された講堂御實前に和賀、山口、小西等の諸部並に本郷、山田、佐藤等の先輩諸氏を始め、遠く横濱、千葉、浦和邊よりも、一年一度の淨業に多列せんものと、折柄の酷暑にも畏れず速早く馳せ付けられた。其處に美しい又書きせぬ情味があることを感ずる。今日は特に先祖の觀念を強調されてゐるが、苟くも孟蘭盆會位には全國的に、小國民をしてお寺詣りと展墓位はさせることが望ましく思ふ。實踐的教化といふことが子供には極めて効果ある養育法であるから。

法要後「法定國清」の題下に機部理事より、日本の國教は既に、桓武天皇様の時、決定され奉つた、今更其の論議の要も有らぬと、又法要の題目に於て、法要の題目に於て、南無妙法蓮華經

原のみと優婆夷逝

淺草報恩團、その前身、顯本宗學研究會に初代の小林上人から、二代山名、三代小西上人、それから現代の山口上人と歷代四十數年、その變たる所の身命財を盡く護法に捧げて専ら奉仕に一貫された。其の純信無難な、剛直強記な、寡欲恬澁な性行は報恩團の名物として誰知らぬ者はなかつた。新潟縣人だけに無類の獨手であり、八十の老妻現代的の學校教育は無論ないが、耳根得道の有難き立派な心がまへは、學士や博士でも子供扱である。實に信心の偉力は恐ろしい。人格の光りは一尊い。

併し洗石の原さんも、我子の化導は斷念されたと思へ、内親の縁は甚だ薄かつたことが痛ましく思はれた。今頃靈山から返つて導かれつゝあるであらう。又日當面と對つては口やかましい原さんでも、陰口は一

容が單に法律とか、眞理とかに局限して、最も大切な人格を忘れたり、宇宙の構成を考慮に入れない幼稚な見解は、大に驚むべきで少なくとも五ヶ條位の點を頭に置いてかゝれと方説し、神道と宗教の別を明かして國體の尊嚴を高調して、皇運扶翼の爲に勇精すべきを念願して降壇、少憩の後、小林一郎先生は「信と行」に就て懇説された、これは近い間に本誌に掲載させて戴くから此所には割愛する。五時前にお題目を三唱してお別れをした。

幹部會 七月十一日午前十一時、幹部會を都合に依り一ヶ橋如水會館に開いて、八月の講習會問題を中心に懇談を交へ、午後二時過ぎ日盛の炎威一入敷しい時、散會更に各自の所要を辨すべく快別した。

土曜例會 小林先生の發覺經講讀も、本年は七月一杯は讀けられ、八月中だけ休ませて戴く。大王將の御馳走も毎度頂戴して居れば感謝の念も薄らぐ様に、道ひ難き正義にも盲龜の浮木といふ處に一段と有難味があるのではあるまいか。三界は安きこと無し、發は火宅の如し、而かも其の中に在つて五欲財利を以ての故に種々の苦を受けつゝも、發地獄に處すること要願に違ふが如く歡喜して大苦を覺らず知らず驚かず怖れず、亦輕説を求めないことは全く度し難いものである。日蓮聖人が、引てあなごらに

福島 教信

七月五日 曇さが頼に加はつた此の日の夕刻、大町中村様方にて支部例會を開かれ、いつもの通り始めに勸修を誓ひ、有難い感激に充足せしめられた。自宅で一人落しく修法するよりも、大勢で聲も高らかに讀經唱題の出来ること、何よりも尊く果報者とつくづく涙に咽ぶ。

修法の後彌部先生より「修行の安心」と題して、お自我爲の一節を中心に有難い法話を戴いた。次いで橋本辰昌師から「天に關して」の有益なお話を拜聴して十時前に閉會した。

諸事不如意の折柄にも、中村おば様が眞心から護法の爲に、一同へ手厚い御供養下さることは、毫に希有の佛事と合掌する。これも、佛様の以何の大慈であらう歟。南無妙法蓮華經

中村謙藏氏訃

東北盛岡の法將、中村謙藏氏が先般來病臥、百方手を竭されたが遂に去六月廿六日阻書に示された通りのお姿を以て佛身を成せられた。

酒悅立正産業報國會延岡記

七月といへば、身延行の懐かしい月である。酒悅産報會員もこの月の第一日曜日をどんなにか待つたことであらう。

今年も都合で去年よりはずつと人数は減つたが、それでも七十名の参加者があつた。また折悪しく警戒警報の發令中であつたが、夫々擔任者を發し、萬一の用意に備へ、一同出發することにした。

當日は朝から小雨が降つて、心配になつたが不思議にも出掛ける頃になると雨も止みかゝつた。横濱あたり相當に降つたらしいが、それもすつかり晴れて車窓から見る一帯の山々や田畑は雨に洗はれて黒々として美しかつた。

毎年店を閉つてから終列車で出掛けるので、途中景色を眺める暇もなかつたが、今年午後一時三分の汽車に乗つたので、日のある中に身延まで行ける。途中ゆくゆく夏のある海山が見られたことは楽しかつた。雨止みて色まさりたる山々の裾よりのぼる霧はの白し

雨晴れし小田の早苗の青き中に眞白く見ゆは白鷺の群

小田原を過ぎて、左手に見ゆるは、太平洋の限りなき大海原である。雨後の靜かな夏の海の一面に霞んだ大きな眺めは美しかつた。

おはわだはゆたに煙らひ沖つ邊の天につ
らなる夏の海原
足下に渚は見ゆれ立つ波のしぶき上らぬ
夏の海かも
汽車は富士の裾野を走つてゐるけれども
車窓に富士を見ることの出来ないのは残念
だつた。裾野だけ大きく見えて、頂は濛々
たる霧の海だ。

立ちのぼる夕霧の中に深くこもり富士の
高根の見分るかたし
富士驛に着いたのが四時三十二分、間を
四分おいて身延へ出る電車があるの、一
回は息をもつかず馳けて乗替へた。一人も
残らず乗れたのは幸だつた。

これから電車は富士の深流に沿つて、身
延迄通る。この邊りは實に天下の裾野であ
る。川岸にそびえ立つ山々、巖をも洗す激
流、藍を湛えた碧潭、嶺の銚杉、遠く連な
る身延の山脈、立ち暈むる夕霧、青白い川
石、何を見ても詩情をそよらぬものはない
右に折れ左に曲る富士川の川水は瀬をか
みて流る。

川に沿ひ電車へのぼるつぎつぎに變りて
止まぬ富士の川水
そより立つ山々の上の銚杉の秀先鋭くと
がり立ちたり
身延山高嶺はあはれ立つ雲にうちおほは
れて見分け難なり
身延山麓の白雲はあはれ立つ雲にうちおほは
れて見分け難なり

雲の海足下にありその底に見ゆるは川の
大さうねりぞ
白々と光り輝き目の下に浮び上れる雲の
大海
山坂を老の年もて分け登りこの雲の海原
も見けん
頂上にて少時憩ひ朝食をなす、七月とい
ふに罌粟の花が満開だ。食事後風親關で田
中先生御導師でお勤めをする。一同感深し
雲つ御手植えの杉など眺め七百年の昔を
偲ぶ。

七百年の齡をたへ雲の上にそより並み
立つ神つ大杉
山の上の巖井にとく大杉の梢を吹きて
夏の風渡る

山上に二時間位も休んだらう。足の弱い
女子を先に山を下りる。山陰にりんどうの
花が此處後處と咲いてゐる。時にまた大杉
の木立の中に入り休む。

山陰の涼しき岩根につましく深山りん
どううつむきて咲く
こゝかしこりんどうの花の咲き垂る山
の閑路下り行くわれは

百千歳經にけん杉のそより立ち見上げれ
ば天をおほひかくせり
土じめり身にせまり来て大杉の木立の中
は晝も小暗し
下りて行く途の途中に小さな瀧の懸つて
ゐるところがあり、去年あたりまでは、ま

の川瀬をのぼる
高き根に居る雲といへいつしかに變るを
見ればあはれなりけり
旅なればさびしかりけり
山も樹々もわびしき
夕陽かけ仄かにたへ川波のしぶく光れ
り音も見えつ

身延驛に着くと自動車が待つて居てくれ
た。たゞこの自動車は、木炭車なので大勢
の乗客を乗せて坂路を上るのが大變である
時々大きな音を立てて止る。そのたびに運
轉手さんが汗だくでエンジンをはけるが一
寸動いては止る。結局乗客に降りて貰つて
動き初めて又乗るといふ始末、この山の中
にも時代風景があつて却つて好ましい。

火を吐きつ噴きあへぎに木炭車身延坂路
音立てるのぼる
木炭車坂の中途に止りしまゝ音のみ立て
て一向に動かず
止るたびに客をば降りし動き初めてまた客
を乗せ山坂のぼる
山門につく、一同勢揃ひして山門の前で
お勤めをする。

身延山つひに今年も来りたりたづみで
おもふこの身の幸を
さざはしの高きをたゞに仰ぎつゝしばら
くわれの經讀むうれしさ
山門より坊に向ふ。坊に入り湯にて身置
を洗ひ、一室向に居るお勤めを偲びし
だめで王子やヤイダーを買つてゐた。山を
下りて来る人は大抵はその茶屋を當にして
ゐるが、今年はその見つけられない。その
先の茶店どころでんを食べてやつと思を
つく。

山の茶屋は固く戸ざしてかたわらの瀧水
のみぞ白々と落つ
瀧の水の落ちたへある水底にひえびえ
として沈むところてん
谷水に冷えまさりたるところてん食みて
山路をわれ下りんとす
敷々御草庵まで降りて来た。去年来た時
よりも御草庵の工事も進行してゐる。来年
になると實に立派なものになるだらう。

御草庵の前を流れる川水の美しいことよ
此の深流の前に庵を建てられた御聖人の御
心を偲び懐かしい思ひがした。田中先生の
御導師でお勤めをする。お勤の後有難い御
法話を伺つた。

谷水の瀧つ瀬となり岩走る山の裾まで下
り来りたり
瀬をかみて谷川の水の走り行く眼近く見
れば目くらむことし

岩陰に河鹿ひをめる谷川の水は岩かみ激
しく走る
手にむすぶこの玉水の冷えまさり飲めば
さえずえと涙みとほる
谷川のはをりに庵建て給ふ聖のごころの
奥ぞしたはし

ない喜びが寧ろ忙しきさになる位有難かつ
た。暮る前に約二十分程楽しい座談會があ
つた。
坊に入り冷たき山の水をもて身體を洗ふ
夏の夕暮
喜びを誰にか告げん身延山今宵佛と暮る
うれしさぞ
瀧の水のかすかに落つるを聞き居しがい
つしか深く眠り入りたり
一夜明けると葉晴らしい天気である。午
前四時一同坊を出發山へ登る。山路は少し
峻しい所もあるが、朝早いので身延に鳴く
鶯の聲で左程困難も感じない。
今朝はよく晴れ渡りたり鷹取山うちか
る雲の一片もなし
鷹取山尾の上の杉の秀の先のあきらかに
見えて日の晴れ渡る
つゝら折り踏みしめ登るそば道に鳴く音
すよしき深山鶯
み佛の使かみやまうぐひすの鳴く音を聞
けば寂れも忘る
山の上に深く立ちこむ白雲を樹々の間に
見つるぼる閑路
敷々頂上にのぼる。日蓮大聖人が毎日の
やうにお立ちになられたこの頂上、山の上
に立つて足下を見下すと濛濛なる雲の海、
崖かに雲の下に身延の町が見え、川が見え、
昨日越えて来た山頂が見える。絶大な
自然の前に吾々はたゞ呆然と立ち居るのみ

山を下りて坊に入り朝食をする。その實
にうまかりしこと。食事を畢り休息す。
焼き豆腐高子の煮びたしゆばなど珍ら
しければいたゞきて食す
驛なく山も下りたり飯も食へり心足らひ
て妻妻す友等は
午後二時、坊を出發身延驛を二時四十六
分の電車に乗る積りだつたが、途中木炭自
動車が故障して身延驛で約一時間待たされ
た。然し幸ひに甲府では同驛發の臨時列車
があつたので、新宿へ着いたのは予定より
三十分遅れた位だつた。八時四十分新宿驛
で、御題目を三唱して解散した。其の夜は
皆よい夢をむすんだと傳言ひない。紙面がな
いので後の方の短歌は全部省略した。
(三郎記)



(三郎記)



次 目

○本部圓報	○産報會記	○入帳報告		
			記事	
			人生と信仰	田中道爾
			本佛實在の宗教哲學(十五)	河合陟明
			信と行(前篇)	小林一郎
			遺文に於ける五大要義(一)	本多日生